

小林秀雄著『本居宣長』：二十七章主題《貫之『古今集・假名序・土佐日記』及び式部『源氏』に於ける、『言霊』の變遷(轉義D1の至大化＝合體Eの至大化)：その「關係論」的纏め》
 ＊即ち、『言霊の(己を掴み直す)歴史的生態(轉義D1の至大化)』『いとまあやしき言霊(物：場 C')のさだまり(物：場 C')』の發展(轉義D1の至大化＝合體Eの至大化)形態。

①言語(物：場 C')②言霊(物：場 C')③環境(物：場 C')⇒からの關係：①は②といふ自らの衝動を持ち(D1の至大化)、③に出會ひ(D1)、「④：自發的にこれに處してゐる[『鋭敏に反應』(轉義：D1の至大化)]」⇒「⑤：姿」(④的概念F)⇒E：事物に當つて、己(①)を驗し、事物に鍛へられて、己の⑤(F)を形成(合體：Eの至大化)してゐるものだ」(③への距離獲得：Eの至大化)⇒宣長(△粹)：①②への適應正常。

關係論：①『源氏』(物：場 C')②『古今』(物：場 C')③わが國の文學史[別稱『言霊』(物：場 C')]⇒からの關係：①が成つたのも、詰まるところは、この同じ方法[即ち『觀念(物：場 C')といふ身輕な己の正體に還つて(即ち、轉義D1の至大化)』]の應用によつたといふところが、⑥を驚かせたのである。「④：⑥は、②の集成(即ち、轉義D1の至大化)を、③に於ける、」⇒「⑤：自覺とか反省とか批評」(④的概念F)⇒E：⑤とか呼んでいい精神傾向の開始(即ち、合體Eの至大化)と受取つた。その[『⑤とか呼んでいい精神傾向の開始』(即ち、合體Eの至大化)の]一番目立つた現れ[即ち『觀念(物：場 C')といふ身輕な己の正體に還つて(即ち、轉義D1の至大化)』]を、和歌から和文への移り行き(即ち、轉義D1の至大化)に見た。この受取り方[『⑤とか呼んでいい精神傾向の開始』(即ち、合體Eの至大化)の]正しさを保證するものとして、⑥は①を選んだ。それ[⑤と言ふ『文學史(即ち言霊)の、合體Eの至大化＝轉義D1の至大化』の正しさの保證]が、②の『手弱女ぶり』といふ眞淵の考へに、⑥が従はなかつた最大の理由だ」(⑤への距離獲得：Eの至大化)⇒⑥宣長(△粹)：①②への適應正常。

